

「批判」ということ 校長 三輪 秀文

批判を受け入れることは、なかなかむずかしいものです。耳の痛いことは、だれだって聞きたくはありません。でも、批判が届かなくなることへの不安を感じることもあります。

過日の話です。

「校長先生、話、長くないですか？」

始業式の後、ある男子生徒が校長室にやってくる、そういうのです。始業式の壇上で話した式辞が長いというのです。ちょっと傷つきました。私が不機嫌そうな表情をしてしまったせいでしょうか。彼は、私に気を遣ってか、こう続けました。

「内容はいいんですけど、ちょっと長すぎるから、あれをもう少し短くしてしゃべたらいいと思う。」



入学式の前だったので、多少時間をとって、後輩を思いやる先輩であってほしいこと、そして、後輩や仲間がくじけそうなときに元気と笑顔を作り出せる人間になってほしいこと、を伝えようとしたつもりでした。しかしながら、長いということが災いしてか、生徒たちには、私の思いが伝わりにくかったようです。

私は、いつも全校の前でしゃべったことを、教頭先生にモニターしてもらおうようにしていますが、その教頭先生には、ちょっとむずかしい内容で伝わりにくかったかもしれないと、時間ではなく、内容についての指摘をされました。校長として、生徒の姿が見えてくるような具体的なエピソードを語るほうが伝わりやすいとの助言ももらいました。確かに、校長くさい訓話的な長話をしてしまったのかもしれませんが。結局のところ、あまりいい始業式の式辞ではなかったという反省に立って、いまは、“次こそは！”と思っています。

また、こんなこともありました。

先日、PTAの合同委員会の後、ある保護者が四中のホームページのことをほめてくださいました。喜んだのも束の間、その後、こうも言われたのです。

「でも、最近、学校であったことの画像ばかりで、“おっ！”と思うようなものが少ないような気がする。」

これまた、ちょっと傷つきました。見えにくい学校情報を、保護者や地域のみなさんに、リアルにお届けできれば、と思っていたのですが、もっと工夫が必要だと感じてしまいました。

批判されることは、やっぱり辛いことです。でも、「批判」は、「批難」ではないことを言い聞かせるようにしています。そして、批判自体が、ひょっとして関心を持ってもらっている証拠なのかもしれません。批判してもらえなくなったら、成長していくことが終わってしまうのかもしれませんが。

「くそっ」と思いながらも、これからも、自分を改める謙虚な気持ちを持って、批判を大切にしていける懐の広さと深さを持ちたいものです。

やっぱりこの文章も長くて伝わりにくいのではないかと、心配している私です。